

審査員特別賞

知ることと、知ってもらう努力

早稲田大学高等学院中学部 3年

スミス 頼安

私はアジア旅行が大好きだ。自分と同じように見える人達の違う文化や歴史を知る事は新鮮で面白いし、その国々の物価や価値観、働き方の違いを見ると勉強になる。私は旅行の際、必ず日本に関係のある歴史的な場所を訪れるようにしている。香港、上海、西安、シンガポール、ソウルなどで自分が学んだ内容とは違う歴史観に触れたこと、外国人が日本について、どのような教育を受けているのかを知ったことは、私の視野を開かせ、新しい世界を見せてくれた。

私がこのように歴史にまつわる場所を訪れるきっかけとなった出来事がある。

以前アメリカで知人が「原爆を使った事で戦争は早く終わった」と言ったのを聞いた時、私は驚いて隣にいた母の顔色を伺った。被爆者二世である母がショックを受けていないだろうかと心配したのだ。しかし母は平然としているようだったので、後であの時どう思ったのかを聞いてみた。母は「日米間で受けた教育の違いがあるのは当然のこと。しかし、日本の原爆資料館を訪れたアメリカ人には、別の意見を持つ人もいて、考え方は人それぞれある。私達日本人は、相手の受けた教育を尊重しながら、日本を知ってもらう努力を続けることが大切だ」と話した。それを聞いて私は、原爆資料館に行った時に父から「昔戦争した日米国際結婚の子供こそ、平和のシンボルとして生きてほしい」と言われた事を思い出していた。

それからしばらく経った2016年、オバマ大統領が広島を訪問した。テレビの前に正座して見ていた母は、大統領が花を手向け、被爆者に寄り添う姿を見て「死んだおばあちゃんにも見せたかった」と言って号泣していた。そして父はそんな母を支えながら、大統領と母の姿に感銘を受けていた。

その場に居合わせた私は、相手の国を理解しようとする行動が、どれほど人を感動させるか、そしてその感動は国や世代を越えて伝わるのだと身をもって感じた。

だからこそ私は様々な国へ行って、自分の目で過去を学び未来を考えたいと思うようになった。現地の人の話を聞いたり、蝋燭に火を灯す事は、今の私にも出来る平和活動の1つの形ではないだろうか。そして多くの外国人に日本の平和の象徴としての場所である広島、長崎を見てもらうだけでなく、留学や就職で日本に住むことで、日本ファンになってもらいたい。

私は、いつか自分が日本と外国の友好的な発展のためのブリッジになりたい。そして日本人らしく謙虚に粘り強く学び続け、日本人であることを誇れる人間になりたい。